

【解説】

## 「職人」は社会の重石

新船海三郎

山本周五郎は江戸の職人たちを多く主人公にしているが、話は多分に人情ものに落とされている。「職人」の気質はよく描いても仕事の細部にわたっての描出ということでいえば、少し物足りなさがある。たとえば「職人もの」にあげられる、よく知られているところでは、経師と大工を主人公にした「さぶ」や同じく大工の「ちいさこべ」も、男同士の友情であつたり、孤児たちへのそれや若い男女間の愛情であつたりする。

本書も例外ではない。中短編のなかから、大工、時計師、植木職、指物師、火鉢職人を主人公にしたものを集めたが、どつぶり人情に絡め取られている。とはいって、彼らの暮らしぶりはもとより仕事にかける思い、さらに気質というものがうかがわれ、ときに、いまの私たちが捨ててしまつた、手足からだを動かして一つことを仕上げる喜び、誇りを思い出させてくれる。

【解説】「職人」は社会の重石

よく、江戸っ子は「宵越しの銭は持たねえ」といわれる。江戸職人の気つ風をよく言いあらわしていると思うが、この言葉は上方、とくに大阪人が金銭に執着するのにたいしていわれたもので、そこには、江戸の職人が幕府開設とともに屋敷や町割り整備などのために徳川のもとの領地であった三河・遠江・駿河や伊豆、甲州などから江戸に呼び寄せられたという背景も関係している。京、伏見、大阪などからは名うての職人が呼べられて各地から集まってきた職人や見習いたちを指導した。

都（みやこ）（政権）の所在や商業発展、人の集住から職人の量質とも上方が上回るのはやむを得ないことだったが、江戸っ子はそれでは収まらない。見返してやりたく、「宵越しの……」となるわけである。だが、貧乏暮らしと背中合わせのその気つ風も、本人はともかく、妻や子にしてみれば迷惑なことだった。余計なことだが、引き合いに出された大阪はたしかにケチだが渋ちゃんではない。必要なときに必要な金は出すのがケチで、渋さんは、金の話になると姿をくらます、と大阪人は解説する。明解だが、渋さんが京都方言であることをここでは気にとめておかないといけない。大阪人はただケチの解釈だけをしているのではないのである。

ともあれ、職人たちとは、当初は新しく造成された神田・日本橋周辺の職種ごとの職人町（たとえば建築関係では大工町、木挽町、大鋸町、白壁町、疊町など）に住まいをもつた。同業者どうしで組合などを作って仕事の配分や賃金の統一などを図るが、江戸の町が外へ外へと広がるにつれて住まいも散らばり、幕府の財政状況なども絡んで、同業種間の関係も取り決めも変遷していく。

江戸時代後期に作られた「諸職人大番付」を見ると、一四〇の職種が諸職と雑形に分けられ、諸職の大関に番匠大工、雑形のそれには刀鍛冶がランクされている。諸職と雑形の区分はよく分からぬが、相撲番付をまねて作られたものなので、相撲の東西をそのように言い換えたものと思われる。

諸職の関脇は壁塗左官で、番付の欄外に薦の者が特別扱いにおかれている。この大工、左官、薦職人は、江戸を支える「華の三職」といわれ、稼ぎもよかつたといふ。年収が現在に換算して八〇〇万円くらい、日当が最上で二万五〇〇〇～三万円ともいわれる。町民が日当三〇〇文、現在にして約五〇〇〇円くらいの時代である。

「立春なみだ橋」に、改悛して仕事に励む新吉を描いたところがある。

「新吉はすっかり生れ更かわつた。

仕事が面白くなれば、もう占しめたもので、なにしろ後に橋田屋うしろという大きな棟梁が控えているし、腕は大工仲間で何人と指に折られるくらいだから、良い仕事だけ拾うようにしても手に余るほどの急がしさ、……正月も三ヶ日が明けるともう引張り廻だこだつた。」

「立春なみだ橋」を「職人の」とするには主人公・新吉の仕事ぶりがほとんど描かれないので、ささか気が引けるが、まだ二〇代と思われる新吉が一日三夕、現在に換算して一万五千か二万円ほどになるのだろうか、ずいぶんな収入であることを知つておきたい。博打に手を出すのは、両親のいない鬱屈などにもよるだろうが、とりあえずは遊ぶ金に困つていなことが背景にある。

「母親」の慈しみを知った新吉が今後どうなるかは描かれないとしても、いい棟梁になつてほしいものと思う。

職人は、それひと筋だけに何となく自分一人（その仕事）が“崇高”なものと思つてしまふ。時計師などという、江戸末期でも江戸に一〇〇人程度しかいないといわれる職人の場合、自分は特別という思いは強かつたろう。が、鋸職から身を転じた三次郎の場合、掛け取りにきた米屋に、頭ごなしに払えないといったとたん、やんわりと返される。

「それから、都合のつくまでは米もお届け申しますよ、だがねえ親方、おまえさんが時計師ならあたしは米屋だ、時計作りは精根をこげるが米屋はちょろつかに出来るといわゆるのものじやがない、職となればなに職だつて骨が折れる、みんな精根をうちこんでやつてるんだ。……どこにだつて都合があるんだから、いま払えないものをもらおうとは云いません。世間は持ちつ持たれつなんだ、おまえさんのように自分ひとりが偉そうに、そうほんほん云うことはありませんぜ」

三次郎を決定的に打ちのめしたのは、南京人の短剣投げだった。畳大の板を背に両手を広げ大の字になつた人間に、体に添うように短剣を投げる。間違えば傷つける。

「一人十文の見料で見せる見世物のたくさんの中の一つです。銭にすれば鑑にもつかぬしがない芸です。そんな芸でもあれほど真剣な眼つきをしてやつているんだ、それなのにあたしこうだ、いつへんでもあんなひたむきな眼つきで仕事に向かつたことがあるか。……親方、あたしはそう思つたとき眼がさめました。高の知れたやせ腕に己惚れて、期限のある仕事はできね

えの、世間にやあ眼がねえのと、ひとりよがりの世迷い言をならべていましたか、いま考えるとばかりの骨頂、めくらの絵説きでございます、面白なくつて身の置き場もございません」

そこに気づけば、三次郎の腕はまっすぐに作品に向かう。

だが、いのちを扱う場合はどうか。植木職だ。「おわりのない仮名」に植木職人の思いの丈を述べるところがある。

「注文どおりの木を搜し、それを移して来て、うまく育てるのはちよろつかなこつちやあねえ、雨風、雪霜の心配から、土替え根肥、枝そろえと、それこそ乳呑み児を育てるように、大事にかけて面倒を見るもんだ、しかもほかの仕事と違つて、百日や二百日で壇のあくこつちやあねえ、木によつても違うが、少なくつて三年、松なんぞは五年も十年も丹精して、どうやら形のつくもんだ、そして、こんなら手を放してもいいといつところまでこぎつけるころには、こつちの血がその木にかよつて、女房子よりも可愛い、しんそこからの愛情がうまれるもんだ、ほかの仕事だつてそうかもしれねえが、こつちの相手は生きている木だ、幹も枝も葉も生きていて、こつちがその気になればぐちを云つたり、笑つたり、叱りつけたりすることができる、木はにんげん同様、生きているし話もできるんだ」

江戸で有数の腕を持つ源次がそのように職に誇りをかけ、精根尽くしても、木は思うがままにはならない。

「植えた木は或るところまでは思うように育つ、秀の立ちかたも枝の張りかたも、こつちの思惑

【解説】「職人」は社会の重石

どおりに育つけれども、或るところまでくると手に負えなくなつちまう、自分で引いて来て移し、大事にかけて育てた木が、みるみるうちに自分からはなれて、まるで縁のねえべつな木になつちまうんだ」

源次が植木職を離れるのは、女房とのこともあろうが、もつと大きな、意のままにならない（無限といつていいくかもしれない）木のいのちを見たからではないだろうか。知恵のかぎりを尽くして木を植える、その有限と、どこまでも生きようとする木のいのちの無限——この有限と無限は、物づくりと商売との綱引きよりも、ある意味でもつと強烈な、生死をかけたものかもしれない。「職人」とは、そこを命がけで生ききる者の称号というと言い過ぎだろうか。

しかし、それがひとりよがりになり、「にんげん同様」と言いながらその正直の「にんげん」への愛情の注ぎ方を知らなければ、人生の潤いがなくなる。源次は、「職人」のもう一つの姿を語っている。

「むかしも今も」の愚鈍なあに弟子・直吉と鋭敏なおとうと弟子・清次という構図は「さぶ」に似ている。が、職人をひと筋に貫いたのは愚鈍とみられてきた直吉だ。博打との縁を切ると上方に出て三年目、親方の命日に帰ってきた清次に、直吉はいう。

「口はどうにでもきくことができる、おらあこのとおりぐずでのろまだから口じやあどうにでもごまかされる、だが人間にはごまかしのきかねえものがあるんだ、駕昇かこあきと縫箔屋ぬはやとは足が違う、指物職人と遊び人とも違うところがある、どこが違う、どこがごまかせねえと思う、清次、……」

手なんだ、ふだん鑿や鉋をいじってる職人と、まつとうでねえ事をしてぶらぶらしている人間た  
あ、手が違うんだ、——こいつだけあごまかせねえんだ、清次、おめえ自分の手をここへ出して、  
これが職人で稼いだ手だと云えるか、云えるなら云つてみて呉れ、それが職人の手か」

指物師は手がものをいう。九歳の暮れから住込み、ぐず、のろま、と罵られ嘲られ、金槌で  
叩かれながら、直吉は仕事を覚えた。道具の研ぎ方、鋸や鉋の使い方、漆や塗り方、とく  
さ磨き、艶の出しお……一つひとつを体で覚え、手指に染みこませた。

指物師と博打うちとは、世間へ渡つていく覚悟も、生きていく性根もちがう。たかが「手」  
ではない。覚悟と性根の据わった「手」だ。

「ちやん」が一九五八年の作だということは大事な何かを私たちに言わんとしている。

世は高度経済成長が本格軌道に乗り出し、三種の神器と呼ばれたテレビ（白黒）、洗濯機、冷  
蔵庫が売り出されてゆたかな消費生活が喧伝された。石炭から石油へのエネルギー革命はすぐ  
そこに迫っていた。チキンラーメンと缶ビールは、食の大重要な何かを奪うようで、儲けと効率  
第一が社会を席巻しはじめていた。

そのときに、周五郎は火鉢の話として、重吉にこう言わせている。

「みんなが流行第一、売れるからいい、儲かるからいいで、まに合せみたような仕事ばかりして、  
それで世の中がまつとうにゆくと思うか」

なるほど、周五郎の「職人もの」は人情物語である。しかし、人情はきちんと仕事をする者

【解説】「職人」は社会の重石

のあいだにしか流れないのである。——かりにも職人なら、自分の腕いっぱい、誰にもまねることのできねえ、当人でなければできねえ仕事を——（しようと）しているから、周りのみんなが手を差しのばすのである。三歳の末娘お芳も廻らぬ舌で「たん、へんな」と、一人前に声をかけるのである。

「どう自分をだましても、どうにもそういう仕事ができねえんだ」という重吉のことばは軽くない。そのように仕事に向かっているか、そのように人生を歩いているか、腹の底を必死に敲いてくるのである。

いつの世だって、自分にしかない「筋」（思想ともいえる）を持って仕事をし、生き通すのは容易ではない。流行り廃りを腕や技能に見立てるのが世間だが、その世間で仕事はこなさなくてはならない。流れれば稼げるが、そこでは腕はもはや無用で、見栄えがよければ文句は出ない。『火鉢は火鉢』である。

それがいつもの時代であるとしても、では本物の火鉢は要らないのか。そうではないだろう。あぶくを対照するのはいつだって本物だ。「職人」とは、たとえて言えばその本物。あるいは、本物をかけがえないものと一念を貫いている存在だ。現代のように、利と力を求めてあさましく右往左往する社会と人間にあつては、殊に、まことに重い、重石といえるだろう。

（しんふねかいさぶろう・文芸評論家）